

| | |
|--------------|---|
| Title | Jane Austen 研究 : Bath 時代の創作姿勢をおって |
| Author(s) | 渡辺, 和子 |
| Citation | Osaka Literary Review. 9 P.107-P.128 |
| Issue Date | 1970-12-14 |
| Text Version | publisher |
| URL | https://doi.org/10.18910/25732 |
| DOI | 10.18910/25732 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

Jane Austen 研究

— Bath 時代の創作姿勢をおって —

渡 辺 和 子

才能に恵まれ、芸術意識を高く揚げる偉大な作家にあって、その空白の時代はしばしば第二の開花への準備期間である。特にこの立往生した期間に残された断片や作品には、彼の文学の本質——たとえば、作者が自らを語るものが少なく、その像を捉えることが困難であっても——がそのまま現われているものである。

Jane Austen が Steventon から Bath へ移る1800年10月から、Chawton に定住する1809年7月までは、執筆を断った空白の時代といわれている。しかし完全に歩を止めたのではなく、なお初期短編の清書と未完の小説を残している。*Lady Susan* と50ページあまりの *The Watsons* である。この二つの作品の特徴——特に共に未完であること——は前期から後期に向けて、作者の artist としての意識が高まり、その主題が固定していく創作姿勢の変化の過程を示してくれるのではないだろうか。

I

前期の終り1798年に書き始められ、1803年に終る *Northanger Abbey* は他の作品に較べ、推敲が少なく、十分創作化されていないが、Bath で完成した唯一の作品といわれる。まずこの小説において、Austen の前期作品の特質を分析していく。

Northanger Abbey は当時の恐怖派小説・gothic 小説の parody として書かれている。gothic の小説はこの小説界に gothic の仮想の世界を築いていく。

Austen の本来の小宇宙, 3 or 4 Families in a Country Village¹ つま

り non-gothic の現実の世界がこの gothic の世界を裁く過程が女主人公の精神的成長に沿ってとらえられていく。女主人公 Catherine は女友達 Isabella に薦められ、‘Oh! I am delighted with the book! I should like to spend my whole life in reading it.’ (P. 40) と Mrs Radcliffe の *The Misteries of Udolpho* に熱中するあまり、現実の世界に幻想的夢物語の世界を仮想する。そこに踏み込んだ Catherine が真実がそのまま通る世界とことばと真実がくい違う世界の両方の意味を理解するまで、Catherine の想像の誤りが続いていく。

このような対照的世界、さらに対照的人物の創造は Austen の創作上のテクニクである。その比較される性質や価値は非常に微妙な相違でありながら、彼女の筆になると、全く相反する真と偽、さらには善と悪の登場人物に色わけされるのである。

gothic の世界は虚偽で作り上げられた悪の世界で、そのことばは歪められ、誇張され、時には事実の反対を意味する。Isabella, その兄 John, General Tilney は vanity, deceit で特徴づけられる偽の世界の人物であるのに対し、Catherine の誤りを正す良識家の Henry とその妹は愛情・友情が支配する真の世界の人物である。例えば John Tilney は数字の正確さでもって、その悪意を包み隠して Catherine を誘惑しようとする。

“Three-and-twenty!”, cried Thorpe; “five-and-twenty if it is an inch.” “Ten o’clock! it was eleven, upon my soul! I counted every stroke. This brother of yours would persuade me out of my senses, Miss Morland; do but look at my horse; did you ever see an animal so made for speed in your life?”

(PP. 45—46)

Catherine の妄想がこうじて、General Tilney は *Udolpho* の登場人物 Montoni と同一視され、Northanger Abbey の屋敷は *Udolpho* の

魔法の城とみなされる。しかし General Tilney は金銭欲から Catherine を金持の娘として厚遇するが、彼女が相続人でないことがわかると、態度は豹変し、彼女を馱馬車で追いかえす。やはり貧欲を Catherine への優しいことばと態度で偽装していたのであり、彼の仮面をはがすことは、gothic 小説への作者の一撃である。

Catherine は, Northanger Abbey の一室にある large closet の中の白い物を奇怪な文書だと思いこむが、実は洗濯のつけであることがわかり absurdity of her recent fancies (P.173) を悟るようになる。最後に白昼夢をさまさすのは聡明で諧謔家、両方の世界の意味に通じる Henry であり、Catherine が偽の世界に接し、真と偽の意味を理解することによってこの偽の世界は結局否定される。つまり女主人公は closet ではなく、現実界の男性の愛情で、実人生にめざめる。従って Austen は、gothic の parody の手段を用いながら、秩序の支配する現実の世界を固守して、小説の世界を限定している。

しかし偽の世界には、これほどの強い反発をひきおこさなければならぬ大きい魅力がある。特に Isabella は十分創作化されきっていないことや、不自然なところを考慮しても、諷刺作家 Austen の最も鋭い諷刺の対象とされているためか、その人物像は生き生きと自由な筆で描写されている。sophisticated, coquettish, malicious, で egoism, caprice をもち、彼女の雄弁は Catherine の稚拙なことばと対照され、小説界のバランスを崩して、女主人公を圧倒する。Isabella が Catherine をピクニックに誘い出そうと口説く時の最上級の親愛のことばはかえって、彼女の友情の裏を示している。

Isabella became only more and more urgent ; calling on her in the most affectionate manner ; addressing her by the most endearing names. She was sure her dearest, sweetest Catherine would not seriously refuse such a trifling request to a friend

who loved her so dearly.

(P. 98)

Catherine だけでなく、二人の男性 James と Captain Tilney を巧みに操る。この様な彼女の装われ、うそで満ちた言動は Austen の小説界とは同化できないのであろうか。後半 Catherine が Bath から Northanger Abbey に移るとともに、プロットから消えて、結局は無知で無垢な女主人公の成長を導く機会を与えるだけの機能で終る。しかし、Isabella の造形は、この女流作家の創造の本能を刺激し、彼女の諷刺にさらに鋭い矢をつがえて、その系譜は次の作品に続く。特に中期に手を加えられた *Lady Susan* の女主人公 Susan は Isabella の延長上にある。

II

Susan の敵 Mrs Vernon は Susan を批判して

One is apt I believe to connect assurance of manner with coquetry, & to expect that an impudent address will necessarily attend an impudent mind ; at least I was myself prepared for an improper degree of confidence in Lady Susan ; but her Countenance is absolutely sweet, & her voice & manner winningly mild.

(P. 251)

一方 Susan は彼女に夢中になっている Reginald に対して

I like him (Reginald) on the whole very well, he is clever & has a good deal to say, but he is sometimes impertinent & troublesome. There is a sort of ridiculous delicacy about him which requires the fullest explanation of whatever he may have heard to my disadvantage.... (P. 268)

彼女の娘に対しては

She shall find that she has poured forth her tender Tale of Love in vain, & exposed herself forever to the contempt of the whole world, & the severest Resentment of her injured Mother.

(PP. 282—283)

この獲物をねらう猫のような情容赦のない、冷酷な女性像は Austen の穏やかな眼が時には鋭く、悪意に満ちた人物の方へ向けられることを示してくれる。

Lady Susan の制作年代には種々の異論があるが、1805年の water mark から、少くとも1805年頃、この作品に対して清書するだけの興味を持っていたと思われる。形式、題材において未熟な点も多く juvenilia に近い。しかし素朴でつつましい家庭婦人であり、軽い諷刺で読者を楽しませながら、社会体制の価値を守る観点から人間をとらえるこの女流作家にあっては、その一貫した厳しさは特異な存在である。他の作品は未婚の若い女性を扱っているのに、ここでは16才の無知で無鉄砲な娘をもつ38才の未亡人を女主人公として、妻ある男性と若い男性との恋愛遊戯を題材としている。

Lady Susan は前期の特質のひとつである書簡体小説である。手紙を交わす人々のグループから、やはり二つの世界が対置されている。Susan とその友 Mrs Johnson の、巧みに art で偽装された世界に対し、義姉 Mrs Vernon とその母の世界である。この二つの世界は手紙形式ゆえ、累積的、対比的に築かれ、女主人公の偽善は内面の告白と外面の行為の報告の二面から描写される。Susan の世界は Consideration & Esteem as surely follow command of Language, as Admiration waits on Beauty. (P. 268) と外面のみが偽装されたものであるが、Mrs Vernon の世界は実質的で natural benevolence・地位・教養が先行する。都会の仮面をかぶった社交会と田舎の実質を伴った家庭生活である。更にこの moral integrity, principle, honor で枠づけされた外面上も内面上も裏の

ない世界から見ると Susan の虚偽でかためられた世界は悪である。deceit の具現として, artifice, artfulness, pride, sensibility, complete amoral woman, coquettish を作者の代弁者 Mrs Vernon は指摘する。まさに Susan は Isabella の系譜にある。

Isabella のように egoism や vanity にかられた行動だけでなく, Susan は Austen の polite society に投げ込まれると, 欲望と年齢・地位から生じる社会的分別との間の葛藤に苦しむ。そこで, 堅固な上流社会の家庭で受け入れて欲しいために, with the deepest conviction of my merit (P. 269) でもって最も愛する Manwarning とはスキャンダルを恐れて別れる。who forget what is due to themselves and the opinion of the World (P. 269) のような女にはならないという。‘World’ に対し, Susan は良識あるような顔を向ける。従って Susan に別れを宣告した Reginald の心を再び捕えて, ‘I am again myself; -gay & triumphant.’ (P. 291) と叫ぶ勝利の歓喜はうつろである。恋人も娘も失って居所もなく放浪する悲喜劇の響さえある。Susan の執拗な passion の背後には一抹の影が漂っている。

単調な手紙の交換の中で, 唯一の劇的波瀾は Frederica が母から強いられた結婚を訴える手紙を, Reginald へ送ることによってひき起される。Susan は seseverest Resentment of her injured Mother (P. 283) を娘に思い知らせると怒るが, 彼女の冷酷な性格は変わらない。つまり常に I am again myself であり, この徹底した悪女の性格は変わらず, 愛を知ることによって, 精神的成長をとげることもない。最後の破局では Susan の操る二人の男性が出合い, 彼女の偽の世界が白日にさらされる。つまり Susan と妻子ある Manwarning との関係が, Reginald との恋愛遊戯の間も続いていたという事実は作者の Susan の世界への道徳上の否定が, 早くから用意されていたことを示す。‘The spell is removed’ (P. 304) と Reginald は Susan から去る。しかし, Susan が Reginald と分れる

のは、もはや彼をもて遊ぶ興味がなくなったからである。I am now satisfied that I never could have brought myself to marry Reginald (P. 308) という所に悪女 Susan は健在しているのである。

このような冷酷な性質を与えられ、性格上他の女主人公のように精神的成長をとげることもないのに、生き生きとした個性が読者の興味をひくのはなぜであろうか。まず Susan の actress としての才能のおもしろさが考えられる。獲物とする男性を思うまゝに操り、黒をも白と思込ませる。なぜなら Susan は Elizabeth の様に、性格の研究家であり、人の心理の先を読む才能があるから。

Young Men are often hasty in their resolutions—& not more sudden in forming, than unsteady in keeping them. I should not be surprised if he were to change his mind at last, & not go. (P. 284)

従って、Reginald は彼女の力の方向を知る道具である。更に Susan は過去の過ちに偏見を抱く人々を征服することを誇とする。I have made him sensible of my power. そして事実思惑通り征服されるのである。

次に、Isabella の様に浅薄ではなく、uncommon union of Symmetry, Brilliancy & Grace (P. 251) をもつことがあげられる。その威厳に圧倒され、Mrs Vernon は Susan の悪意を知りながら、手が出せない。

‘I have not detected the smallest impropriety in it, — nothing of vanity, of pretension, of Levity—& she is altogether so attractive.’ (P. 255)

では Susan は全く否定されるべき人間像であり、この断片の主題は教養も知性も美も、moral が欠けていれば無意味であるということなのであろうか。或はこの作品ではそのような道徳的面を強調するのではなく、見

せかけと本質・無力な虚栄と観念との葛藤を示し、悪の世界の妖女 Susan の描写に終始しているのであろうか。テーマのない小説といわれる Austen の小説の中でも、特にこの小説にはテーマらしいものはないが。

更にこの小品が終り近くで筆を折られ、‘Conclusion’ を付け加えられていることはどの様に評価されるであろうか。

ここで注目しなければならないことは、作者がその題材を身辺から取ったのではなく、フランスの小説 Choderlos de Laclos の *Les Liaisons dangereuses* から創作への刺激を受けたということである。² Susan に社交界の女性 La Marquise de Merteuil をふまえているのである。従って彼女のような無慈悲で好色な女性が Austen の描く小宇宙に投げ込まれると、どの様になるかということが興味の中心となる。

Austen の欄外のノートから抜き出された ‘Plan of a Novel, according to hints from various quarters’ によると、

Heroine a faultless Character herself—, perfectly good, with much tenderness & sentiment, & not the least Wit—very highly accomplished... the most accomplished young Women³

heroine としての Susan の造形はこれに反する。従って Isabella の世界同様、Susan の世界も結局は否定されるべきものであろう。それを綿密に計算された筋の展開をみせる Austen はこの作品の途中で筆を折ることによって示したと考えられる。

Austen は *Lady Susan* を消書する頃に、散文形式の ‘Conclusion’ を付け加えて、手紙形式の小説をからかった後、プロットを完結させている。軽い諷刺で満ちている ‘Conclusion’ では、Susan はかねて娘の婿と予定されていたばかり James と結婚し、彼女に誘惑され、夢中になっていた Reginald は ‘talked, flattered & finessed’ (P. 313) して、愛情を Frederica に移すよう、Mrs Vernon によって画策される。Susan の心を

捕えた Sir James は ‘an harder Lot than more Folly merited.’ (P. 313) と揶揄される。ここに、‘Conclusion’ は書簡体小説への訣別であると共に Susan の世界への痛烈なアイロニーによる拒絶である。

更にこの Susan の性格は作者の観察できる面を越えた存在であり、aesthetic distance が題材との間にある。Southam は Susan の創造について、

It is Jane Austen’s very failure to make Lady Susan a figure of real menace that asserts the author’s essential ignorance of a ‘wholly sinister’ or ‘vicious’ woman.⁴

しかし *Lady Susan* は全くの失敗ではなく、むしろ前期の感傷的家庭小説の霧を払いのけた熾烈な悪の世界への接近として評価できる。確かに Susan は Austen の創造する人物像の否定的側面を拡大し、art を強調したものである。ここにこの女流作家の一展開が見られるのである。Susan の偽善のリアリティは Austen の作品中傑出していて、そのよく制御された厳しさにおいて、書かれることのなかった傑作を期待させるものである。

moralの制約と悪の人物への接近の間で、Austen は揺れていたのが、*Lady Susan* の放棄は moralist としての制作態度の確立ということとその意義は大きい。この創作姿勢は次の *The Watsons* で跡づけられる。

III

Bath の完全な空白時代の前1803年頃に書かれた未完の小説 *The Watsons* は前期から後期への橋渡しの位置にある。

場面は舞踏会と The Watsons 家に分けられる。最初の舞踏会の予告で、三階級三家族一貴族の Osborne, 町の金持 Edward, 田舎の没落郷士 Watson を位置づけ、女主人公 Emma Watson を導入している。‘the Osbornes are coming’ (p329) で始まる ball から、むだのない会話体で

進行していく *The Watsons* は大作となりうる要素を十分備えていることを示している。しかしプロットの進展につれ, Emma は心の中に閉じこもり, 舞台は上がったまゝ身動き出来なくなっている。

女主人公 Emma は思慮分別を身につけ, ‘The Luck of one member of a Family is Luck to all. (p. 321) と, 教訓をたれる完全無欠な女性である。さらに構造上視点は Emma にあるので, Emma の思考の方向に読者はついて行く。そこには批判の余地はなく, Emma は常に正しく完全である。そして興味は Emma 自身よりも, Emma が周囲の人々に下す価値判断に向けられる。その基準は moral である。姉を裏切る行為をした Penelope を非難して, ‘she has her good qualities, but she has no Faith, no Honour, no Scruples, if she can promote her own advantage.’ (P. 317) この ‘Faith’, ‘Honour’, ‘Scruples’ をもつ人間が moral あるとみなされるのである。彼女の moral は社会体制から受ける実生活の秩序, さらにはもっと柔軟な意味をもつ。Mudrick はこの moral の主調を強調して,

In the Watsons, Jane Austen has for the first time immersed herself wholly in the grim business of vindicating genteel morality against the society it is organized to uphold. She is, in fact, so pledged to her moral issue that she has lost any sustained shaping interest.⁵

その moral の判断は Emma の家族の無秩序へ向けられる。

She felt a little uncomfortable in the thought of all that was to precede them. Her conversation with Eliz; too giving her some very unpleasant feelings, with respect to her own family, had made her more open to disagreeable impressions from any other cause... (P. 322)

即ち家族の 'Hard-hearted propriety,' 'low-minded Conceit & wrong-headed folly', (P. 361) 上流階級の猿まね, さらには娘 Margaret の 'affected tone of artificial Sensibility', (P. 351) に, Emma はその道徳観から恥しさと嫌悪感を抱き, ついには苦悩へと発展する。Osborn の訪問で, 'all that must be open to the ridicule of Richer people in her present home — of the pain of such feelings.' (P. 345) 家族との異和感・隔絶感から, 孤独感を暮らせるだけである。そこで父の病いのベッドへ逃避する。

In his chamber, Emma was at peace from the dreadful mortifications of unequal Society, & family Discord—from the immediate endurance of Hard-hearted prosperity, low-minded Conceit, & wrong-headed folly, engrafted on an untoward Disposition.

(P. 361)

この様な Emma のもつ moral ゆえに抱く孤独感は前期作品の女主人公には跡づけられないが, 後期作品・特に晩年の *Persuasion* の Anne の特質のひとつとして挙げられる。

Emma は moral の具現であり, 人格は与えられていないが, 唯一その epiphany of character を見せる場面がある。Mrs Blake の息子が踊る相手がなくて失望しているところ救い, その少年と踊る ball の場である。'Emma did not think or reflect ;—she felt & acted.' (P. 330) 解決のない思いにふける Emma ではなく, 行動する Emma に静から動への魅力がある。この物語が軌道に乗ったところで, 強烈な個性を必要とすることが物語を進行させるはずみがないという欠点を反映させている。

登場人物に対する作者の諷刺の程度から, character は二つに分けられる。Austen の人物描写のテクニクとして, 諷刺の的となる人物群と作者の愛情でもって, まじめに扱われる人物群である。Mudrick のいう

‘shaping irony and shapless solemnity’である。⁶ 前者には Osborn 家の人々と Tom があげられる。Lord Osborn の城は貴族階級の象徴である。しかし彼の Emma へのプロポーズが拒絶されたことによって、彼の権威も地位も無に等しく、その城は ‘great people’ としての地位に足かせされた一種の怪物となる。Osborn の追従者 Tom Musgrove は身分の社会的不安定に虚勢の仮面をつけて、Osborn に侍えるが、むしろ利用している面の方が大きい。社交婦人の興味的であり、Emma と姉 Eliza との話題も彼に向けられる。彼を批評して、Emma は

I allow his person & air to be good—& that his manners to be a certain point—his address rather—is pleasing,—But I see nothing else to admire in him.

Tom の御機嫌取としての仮面とその依存根性は痛烈なアイロニーへと発展する契機を与える否定的要素である。*The Watsons* の登場人物の中では唯一の魅力的人物であるが、しばしば主役をおしのけてのさぼっている。しかしこの Tom の創造は偽の世界の人物像の系譜が止ぎれる事がなく、Austen のこの世界への執着はより深く、その創造はより洗練されてくことを示している。

もう一方まじめに扱われる character には作者の代弁者であり、その良識で人々を裁断する Emma であり、Howard である。理性的紳士 Howard は Austen の最初の ‘*practising clergyman*’⁷ といわれ、moral の問題を提出している。さらにこの人物群の中から、一抹の pathos が流れ、まじめな筆致で描かれているため、一層暗いかげりを作品に投げかけている。

Mr. Watson は病いに伏した社会的失敗者であり、四人の未婚の娘達には何もしてやれず、常に思い出にふける逃避者である。そこには前期の明るいユーモアはなく、ただ悲痛な暗さのみがある。Elizabeth も夫を見つ

けようとする悲しい努力が今やあきらめとなっている。そこにも微妙なかげりを漂わせている。

I could do very well single for my own part—A little Company, and a pleasant Ball now & then, would be enough for me, if one could be young for ever it is very bad to grow old and be poor and laughed at. (P. 317)

1813年の Austen の手紙の中で *Pride and Prejudice* を評して、‘The work is rather too light, & bright, & sparkling; it wants shade’⁸ と書いているが、1805年前に書かれたこの小説に露骨にはあるが‘shade’が表われていることは注目に値する。Austen は中年になる頃までに、この‘shade’を十分にマスターして円熟期の作品 *Emma* の Bates 老嬢に *Persuasion* 全体の雰囲気反映している。

この様な後期作品を暗示する特徴をもちながら *The Watsons* は物語が軌道に乗りかけたところで放棄されている。この放棄の理由を考察してゆくと、story-teller Austen の創作態度の特徴が自らうかがえる。

まずこの断片は‘entertainment’としてのおもしろさに欠けている。なぜなら女主人公の性格があまりに完全すぎて誘惑にも抵抗が予測できプロット発展の興味が無い。つまり女主人公の犯す誤りを是正して、精神的成長に導く Henry のような他の存在も必要ではない。最初に目標が出て何ら曲折するこちもなく如何に何が起るかというサスペンスがない。Emma は Mr. Howard を最初の出会いから、‘there was a quietly-cheerful, gentlemanlike air in Mr Howard which suited her (P. 333) と、未来の夫として認める。また家庭の無秩序から受ける苦悩も、Emma 自身が作り出し、その胸中で反芻するのみである。この meditate する女主人公にはプロットを展開する役目は重すぎる。

さらには *The Watsons* には *Lady Susan* の勢い・はずみがなく、そ

の雰囲気は重々しい。

題材の設定が失敗であるとして ‘Memoir’ では

‘Jane Austen becomes aware of the evil of having placed her heroine too low, in such situation of poverty and obscurity as, though not necessarily connected with vulgarity, has a sad tendency to degenerate into it.’⁹

Mansfield Park の女主人公を例に挙げるまでもなく、女主人公の背景は決して失敗だとはいえないであろう。場面の設定については前に述べた通り、十分書かれなかった大作を予期させる。

この様な *The Watsons* 自身のもつ欠点の他に、Austen の伝記的要素が創作の意欲を失わせたと考えられている。元来 Austen は家族の励ましの下に創作活動をしていたが、Bath ではその家族から離れ、落着かない生活を送っていた。Bath の印象を Cassandra への手紙の中で、‘Our first view of Bath has been just as gloomy as it was last November twelvemonth.’¹⁰ さらに1804年11月の友 Mr. Lefroy の死、翌月の父の死が重なる。また ‘Susan’ (Northanger Abbey) の出版の失敗は彼女の創作意欲を失せたのであろう。この頃唯一のロマンス ‘nameless and dateless romance’¹¹ の相手の死による悲恋も伝えられている。Bath でのこれら諸々の不幸が Austen を沈黙させたのであろう。

The Watsons の白黒画は父の死後再び取り上げ、完成に向わせるだけの興をこの女流作家にひきおこさなかったのであろうが、しかし *The Watsons* の欠点故の意義もまた大きい。Austen は完全にその題材から逃がれるのではなく、十分 ‘lop’t & crop’t’¹² されていない題材に、改たな生命を与え、後期作品に反映している。Chapman は *The Watsons* を *Emma* のスケッチとみなしている。

The scene of both is Surrey. Mr. Watson is a faint adumbration of Mr. Woodhouse. Mrs. Robert Watson is a strikingly suggestive of Mrs. Elton. Emma Watson is very like Jane Fairfax in situation, and—so far as we get to know her—not unlike Emma Woodhouse in character.¹³

さらに *Persuasion* の Anne の孤独感から諦感へ、そして堅忍へという過程に反映している。Emma は *Mansfield Park* の Fanny と酷似した点も多く *The Watsons* は *Mansfield Park* の下書きとさえ思われる。これらの点から、この始められて完成しなかった小説は、それ自身における価値よりむしろ後期作品の素描として評価される。完成した小説への予備行動である。

IV

1809年 Chawton へ移ると、立往生していた小説家は歩みを始め、その死に到るまでたて続けに作品をものにしていく。1811年、新たに書き始められ、円熟した作品のひとつとみなされる *Mansfield Park* に如何に Bath 時代の *Lady Susan*, *The Watsons* が再編成されているであろうか。

まず *Northanger Abbey* と *Mansfield Park* とを比較してみると、小説の題名は共に田舎の屋敷の名称である。そこでは女主人公がその屋敷の主人、General Tilney と Sir Thomas Bertram の権威の下に仮の宿をとるが、小説の終りでは、そこが永久の住みかとなる。しかしその題名が示す象徴的意味は違う。*Northanger Abbey* と General Tilney は gothic romance の世界に属し、その中で白昼夢をみていた Catherine に、実人生にめざめさすきっかけを与える。一方 *Mansfield Park* は秩序と良識の域であり、主人公の行動と判断の指針となっている。*Northanger Abbey* の gothic, non-gothic, つまり偽と真の世界の対照が、*Mansfield Park* では moral の深い統一形体の中に組み入れられている。行為の善悪の判

断を下す moral は Catherine の意識下にわずかに窺えるが、この後期の作品では、まさに moral の問題、Fanny のもつ良識の試練がプロットの興味の中心である。Bathで moral に主題を見出した Austen が burlesquer から moralist へと変化しているのである。Austen は、手紙の中でこの良識を指摘して、...to those who have preferred 'MP' very inferior in good sense.¹⁴

この Fanny には *The Watsons* の Emma の像が継承され、一層人間的個性をもって小説の世界に融けこんでいる。Emma が家族の乱雑、俗物根性に苦悩するのと同様に Fanny は Edmund の教育の下に秩序を信奉し、周囲の人々の無思慮、生家の無秩序、とげとげしさにいらだつ。加えて Edmund に対する気持は歎びと苦痛の混じった心理の劇的動揺を伴っている。Edmund の Mary への愛情を知ると共に焦躁へとかりたてられる。馬上の二人を目撃して、

she (Fanny) wondered that Edmund should forget her, and felt a pang. She could not turn her eyes from the meadow ; she could not help watching all that passed. (P.67)

しかし苦悩や困難に遭遇しても、信仰や宗教に解決を求めることはない。つまり Austen の moral は決して宗教的ではなく、むしろ現世的である。Emma が父のベットのそばに逃避する様に、Fanny は East Room に引きこもり、良識を崩壊さす危機から脱れる。その休息の場は父のベットより積極的意味をもち、秩序と精神的自由の象徴である。そこで 'restless, self assertive immorality' に脅かされる 'stability', 'order', 'moral', 'repose' を守るのである。

この Fanny の良識の城を脅かすのが Henry と Mary である。悪に魅力を与えるのは容易であるし、又 Austen が悪の人物の創造に巧みであることはすでに指摘した通りである。

Gilbert Ryle は Austen の moral が aesthetic terms と結びつき、

duty, propriety aesthetic taste が相関関係にあり、登場人物はこの三つを備えているか、欠けているかであると指摘している。¹⁵しかしこの二人は aesthetic taste をもちながら、duty, propriety に欠けている。Mary の性質について、

She had none of Fanny's delicacy of taste, of mind, of feelings; she saw nature, inanimate nature, with little observation; her attention was all for men and women, her talents for the light and lively. (P. 81)

つまり delicacy of taste, of mind, of feeling が Fanny のもつ moral である。特に Mary は Fanny と、性格的にも機能的にも、Isabella と Catherine の様な対照的位置にある。Fanny の冥黙に対し Mary は黒目を輝かして芸術的趣味と雄弁で女主人公を圧倒する。Fanny が静かに人々を観察し、話の聞き役であるのに対し、Mary は 'loves to be doing' である。Fanny が田舎の静寂を愛するのに対し、Mary は London の喧噪を好む。この田舎と都会、nature と art の対照は Mrs. Vernon と Susan のそれである。

Mary はリアルな個性を与えられているにもかかわらず、作者は発展の弾力を与えず、否定的意図の下に置いている。なぜなら Mary の価値は無秩序にあるから。Mary は Edmund の教養にひかれ、お互に愛情を示しながら、彼の職業に対する偏見—'clergyman is nothing' (P. 92) という考え—の故に、恋は発展して行かない。この偏見は Mansfield Park の秩序の拒絶であり、moral の欠如を示す。なぜなら牧師職には、現実に根をおろした作者の絶対的価値があるから。ここで ordination の問題は Mary の世界と Fanny の世界を対置させてくれる。Austen 自身、*Mansfield Park* を始める時、'Now I will try to write of something else, & it shall be complete change of subject—ordinaton!¹⁶ Mary は結局

ordination を受け入れることができず、その結果 Henry と Maria のかけ落ちの判断を誤る。そこで Edmund は Mary の dupe になることからまぬがれる。

Her's are not faults of temper. She would not voluntarily give unnecessary pain to any one, and though I may deceive myself, I cannot but think that for me, for my feelings, she would—Her's are faults of principle, Fanny, of blunted delicacy and a corrupted, vitiated mind. (P. 456)

この Edmund の鋭い非難のことは、作者の Mary の世界への拒絶である。

Henry も素人劇の上演と Sartherton への遠出でその正体を表わし始める。彼は *Love's Vows* の最も巧みな演技者であるばかりでなく、実生活の演技者でもある。彼の演技は劇の上演を反対する Fanny の賞讃さえ勝ち得るが、実は最初から仮面を被っており、彼の仮面の裏には、危険な落とし穴がある。Fanny への戯れの愛の告白から、彼女を真剣に誘惑し始め、その相手として、自然な精神的成長をとげながら急に道徳上の墮落者になるのである。つまり Maria との不名誉なかけ落ちという事件で、演技することを拒む Fanny, Edmund の moral から排撃される。Henry と Fanny は相反する世界に住んでいるから、当然 Fanny は Henry を拒否する。

さらに Maria の婚約者の屋敷の散策の場面で Henry と Maria が彼女の未来の夫の鍵を待たずに、空堀を越え庭に入るという行為は、moral の枠を越えるという 'special emotional and moral significance'¹⁷ をもつ。そこで二人の不道徳なかけ落ちは、作者の綿密な構成の下に、あらかじめ用意されていたことになる。この様に Henry—Mary の偽の世界の拒絶は、前期作品の露骨さをなくし、筋の発展と深い関連をもって、巧みに女

主人公に働きかける。

Bradbrook によると、Henry は先に言及した Laclos の小説の ‘heartless seducer Valmont’ の ‘milder, anglicized, version’ である¹⁸。しかしながら *Lady Susan* ほど酷似しておらず、もっと完全に創作化されているが、Isabella, Susan から Mary, Henry へと villain の系譜を鮮かに描いている。

Mansfield Park の moral の勝利はあまりに断定的に強調されるので、悪の発展の結果のかけ落ちは、作者が筋を運ぶ必要上から、仕組まれたかにさえみえる。しかしこの悪の世界の否定は創作上より、むしろ作者の道徳的制約であるからであろう。つまり、作者の moral から異質と思える悪の世界の人物には、作者の墮落（moral に反する行為）への用意周到な準備がプロットの背後でなされて、その小説の世界の構造に、はっきり枠づけを置いている。Isabella の Captain Tilney との関係、Susan の Manwaring との関係、Mary の偏見、Henry の Maria との関係等。

偽の世界を主題とする *Lady Susan* の ‘Conclusion’ は、作者の諷刺ではなくこの moralist の弁解であり、創作の世界の moral の揺がぬ優位を告げるものと考えられる。それは *The Watsons* で主題として試みられ *Mansfield Park* で完成する。

しかし、moral からはみだした否定的要素をもつ人物の系譜はさらに *Emma* の中に、一層その要素は多様化され、リアルな個性を与えられながら、作者の moral へと融合していく。*Emma* の執筆を前にして、Austen は ‘I am going to take a heroine whom no one but myself will much like!’¹⁹ と書いているが、悪の人物への作者の執着は moral の枠の中に Mary の魅力を確認していくことに示される。

ここで Austen の人物造形の裏面、つまり対照的世界を置き、一方の偽の世界の創造に作者の可能性—Austen にあっては、現実そのまゝの真の人間像より、むしろ技巧の仮面をつけた人物にその才能が縦横に発揮でき

るのではないか——を強調した。

Charlotte Brontë は先輩女流作家 Austen に情熱が欠けていることを批判して

She ruffles her reader by nothing vehement, disturbs him by nothing profound. The passions are perfectly unknown to her Even to the feelings she vouchsafes no more than an occasional graceful but distant recognition.²⁰

Austen が全く人間の感情・情熱を拒否しているということに対しては、この Bath 時代の作品で反論されるであろう。偽の世界の人物はある程度の情熱をもち、また feeling が後期作品には跡づけられるから

Lady Susan における作者の無責任な見物の笑いから、後期作品 *Mansfield Park* では女主人公の深いまじめな意識・人間の心理を作者はとらえている。

inspiration を実生活から与えられた素人作家は 着実な専門意識をもって主題を moral の中に限定する moralist 作家へと成長していく軌跡が *Northanger Abbey* と *Mansfield Park* との間に、未完の *Lady Susan* *The Watsons* を置く時一層はっきりするであろう。空白時代のこの二編がなければ後半の円熟期にたどりつけたかどうか疑わしい。*Lady Susan* は前期の終りを、*The Watsons* は後期の始まりを告げるものであるから。

使用テキスト

- Jane Austen, *Northanger Abbey* vol. V. "The Novels of Jane Austen" ed. R. W. Chapman (London, Oxford University Press, 1965)
- Jane Austen, *Lady Susan, The Watsons* vol. VI. *The Minor Works, "The Works of Jane Austen"* ed. P. W. Chapman (London, Oxford University Press, 1963)

- Jane Austen, *Mansfield Park* vol. III “the Novels of Jane Austen”
ed. R. W. Chapman (London, Oxford University Press, 1960)

註

1. Jane Austen, *Jane Austen's Letters to her sister Cassandra and others*, ed. R. W. Chapman (Oxford University Press, 1932) to Anna Austen, September 1814. P. 401
2. Frank W. Bradbrook, *Jane Austen and her Predecessors* (Cambridge University Press, 1967) P. 123
3. Jane Austen, ‘Plan of a Novel’ *Minor Works* (Oxford University Press, 1965) P. 428
4. Southam, *Jane Austen's Literary Manuscripts* (Oxford At the Clarendon Press, 1964) P. 51
5. Marvin Mudrick, *Jane Austen, irony as defense and discovery* (University of California Press, 1968) P. 153
6. Mudrick, *op. cit.*, P. 141
7. *Ibid.*, P. 149
8. Jane Austen, *op. cit.*, to Cassandra Austen. Feb, 1813. P. 299
9. Austen-Leigh, *A Memoir of Jane Austen* ed. R. W. Chapman (Oxford University Press, 1926), P. 65
10. Jane Austen, *op. cit.*, To Cassandra Austen, May, 1799. P. 59
11. R. W. Chapman, *Jane Austen : Facts and Problem* (Oxford ; the Clarendon Press, 1948) P. 66
12. Jane Austen, *op. cit.*, to Cassandra Austen. January, 1813 P. 298
13. R. W. Chapman, *op. cit.*, P. 51
14. Jane Austen, *op. cit.*, to James Stanier Clarke. Dec. 1815 P. 443

15. Gilbert Ryle, 'Jane Austen: And The Moralists' *Critical Essays on Jane Austen* ed. B. C. Southam (London Routledge & Kegan Paul, 1968) P. 117
16. Jane Austen, *op. cit.*, to Cassandra Austen Jan. 1813 P. 298
17. Charles Murrah, 'The Background of *Mansfield Park*, *From Jane Austen to Conrad* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1958) P. 31
18. Bradbrook, *op. cit.*, P. 123
19. Austen-Leigh, *op. cit.*, P. 157
20. Charlotte Bronte, letter of 12 April 1850 to W. S. Williams. Mary Lascelles, *Jane Austen and Her Art* (Oxford University press 1963) P. 119から引用